（２）人丸塚と明智光秀

別所長治との対決が避けられなくなった羽柴秀吉は、東播磨に点在する別所陣営の拠点の各個撃破を意図する。手始めに、「播州一ノ名城」（別所長治記）といわれた野口城（加古川市）を攻略するのが天正６年（１５７８）４月１２日（清水寺文書）。ところが１８日に、吉川元春・小早川隆景・宇喜多直家ら５万余の軍勢が、上月城を包囲した。前年の冬、尼子再興を旗印に、信長の支援を得て上月に入城していた尼子勝久・山中幸盛らは、書写山の秀吉に毛利の来襲を知らせた。緊急事態は、秀吉からただちに信長に伝えられ、織田の主力部隊が、信忠の指揮下に播州出陣となった（武将で、不参加は芝田勝家と林通勝ぐらい）。

当時、丹波八上城を攻囲中の明智光秀も、５月２日に明石に到着している。しかしながら明石川の洪水で、渡河不能となり、まる一日を明石で過ごす。その間に人丸塚（現在の明石城）に登り、

夏ハ今朝嶋かくれ行なのミ哉

と詠み、書写山についた日（４日）、連歌師として著名な里村紹巴に、直筆でしたためている（竹内文平氏文書）。明石海峡を見渡しながら、思わず口をついて出たものであろう。上記の句につづけて、光秀が、明石から姫路に向かう途中、敵（別所方）は立て籠もり、合戦の体をなさなかったとも記されており別所方は徹底した籠城戦を選択していることがうかがえる。後世の野次馬からすれば、ぜひともに一戦を交えてほしかったと思うのは、筆者のみではなかろう。

日本歴史学会会員 茨木 一成

人麿塚